



特定非営利活動法人 IKUNO
多文化ふらっと

NPO法人 IKUNO・多文化ふらっと

年次活動報告

ANNUAL REPORT 2021

2021年4月1日～2022年3月31日



外国ルーツ青少年の大阪・多文化デイキャンプ（2022年3月）

大阪市生野区に多文化共生のまちづくり拠点の構築を通じて
誰もが暮らしやすいグローバルタウンを創る



代表メッセージ

ちがいがたくさん あることは、豊かなことだ

「今、ここに生きている“わたし”」の存在とは、それ自体がかけがえのない尊厳を持つ“いのち”の証（あかし）にほかなりません。しかし、いま日本で暮らしている多くの人たちが、「効率」「競争」などの価値観が強調される中で、そうした実感ももちながら暮らしているようには見えません。貧困や差別・偏見などに直面し、心身ともに不条理な苦痛に悩まされている人も少なくありません。何より、苦痛を受ける隣人たちを平気で見過ごしてしまう不寛容な社会の風潮が強まっています。自分の“いのち”も人の“いのち”も大切にするこの意味を掘り下げたり、共感したり、寄り添ったりする日々の営みがおざなりにされています。

私たちが活動している大阪市生野区には、在日韓国朝鮮人と日本人との長い歴史があり、いまは新たに60カ国を超える外国ルーツの人々が暮らしています。また、高齢者で一人暮らしの方や、障害のある方もたくさん暮らしながら活躍されています。年齢も、国籍も、言葉や習慣、家族のあり方も含めて、たくさんの“ちがい”がここにはあります。「“ちがい”がたくさんあることは、豊かなことだ」と感じています。たくさんの“ちがい”に出会うことによって、新たな自分を再発見することにもつながります。新しい価値や仕組みを未来に向けて創造するときの原動力にもなります。

“ちがい”を大切にし、尊び、喜び、活かしあう「面白い」まちを、誰一人取り残されず、ともに助け合い生きていける多文化共生のまちづくりをめざしています。その試行錯誤の過程を大阪・生野から、関西へ、日本へ、全世界へと発信していきたいと願っています。「IKUNO・多文化ふらっと」は、行政や企業の皆様との協力・協働も積極的に模索しながら、「今、ここに生きている“わたしたち”」が、わたしたちらしく生きていくことのできる市民主導の多文化共生のまちづくりに挑戦します。

特定非営利活動法人IKUNO・多文化ふらっと
代表理事 森本 宮仁子・榎井縁

団体概要

■役員

名称	特定非営利活動法人IKUNO・多文化ふらっと	
所在地	〒544-0034 大阪市生野区桃谷4丁目5番15号班家食工房2階	
代表理事	森本宮仁子	大阪聖和保育園事務局長
代表理事	榎井縁	大阪大学大学院人間科学研究科付属未来共創センター特任教授
理事※1	金谷一郎	大阪経済法科大学客員教授/元東淀川区長
理事	川端麗子	神戸女子大学健康福祉学部准教授
理事	木村和弘	株式会社コリアアジアセンター代表 一般社団法人いくのもり代表理事
理事※2	宋悟	NPO法人クロススペース代表理事
監事	田中逸郎	NPO政策研究所理事・主任研究員 元豊中市副市長
監事	宮本圭造	税理士

※1 コンプライアンス担当理事を兼務 ※2 事務局長を兼務

■沿革

2019年6月	任意団体として団体設立
2020年4月	(公財)日本国際交流センター「外国ルーツ青少年未来創造事業」助成金を受託
2020年9月	大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI) と協力プロジェクトを開始
2020年10月	特定非営利活動法人の認証を取得
2020年12月	御幸森まちづくり協議会との連携・協力協定の締結
2021年9月	御幸森小学校跡地活用事業に関する活用事業者募集プロポーザルの事業予定者に選定 (2022年4月から/株式会社RETOWNとの共同事業体)
2021年12月	大阪市生野区役所と包括連携協定を締結

VISION

大阪市生野区における 多文化共生のまちづくり拠点の構築を通じて 誰もが暮らしやすい全国NO.1の グローバルタウンを創る。

私たちの活動拠点である大阪市生野区は、区民5人に1人以上が外国籍住民であり、全国の自治体で最もその比率が高い多国籍・多文化のまちです。オールドカマーの在日コリアンを中心に60か国以上の外国ルーツの人々が暮らすまちです。私たちは2022年4月から全体ビジョンの実現を目指して旧御幸森小学校の跡地活用として多文化共生のまちづくり拠点「いくのコーライズパーク」（略称：「いくのパーク」）を運営していきます。市民主導による人的交流と論議、情報交換と共有、学びと実践の場を株式会社RETOWNと共同でつくることで、「多文化共生の生野区モデル」の構築に挑戦します。

事業コンセプト

私たちは学校跡地施設を「いくのコーライズパーク」（略称：いくのパーク）と名付けます。
この施設名には、私たちが判断し行動していくうえでのコア・バリュー（核となる価値観）が込められています。

コア（CO） 「ともに」 生きていくこと。

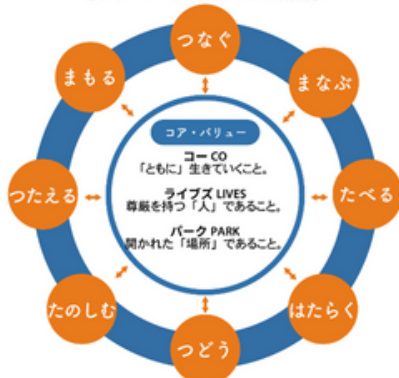
ライズ（LIVES） 尊厳を持つ「人」であること。

パーク（PARK） 開かれた「場所」であること。

〈つなぐ〉〈まなぶ〉〈たべる〉〈はたらく〉
〈つどう〉〈たのしむ〉〈つたえる〉〈まもる〉
という8つの包括的な機能をもつ、この地域拠点をベースに9つの事業にチャレンジしていきます。

多様性はイノベーションの源泉です。
私たちは生野区の独自性・魅力である「多国籍・多文化」の地域特長を最大限に活かし、さまざまな職種・セクターの人や組織の創発的な取り組みを通じて、日本人も外国人も誰もが暮らしやすい、全国でNo.1のグローバルタウンをめざします。

【コア・バリューと8つの機能】



事業全体図

全体ビジョンを実現していくうえでの私たちの最大の特長は、生野区の内外に幅広いネットワークを形成していることにあります。多文化共生のまちづくり拠点の構築に関わる直接・間接的なステークホルダーは、現在だけでもNPO、大学・学校、企業、公的機関など71団体以上に上ります。さまざまな領域や分野を横断する情報交換やアイデアの交流を通じて創発的な取り組みが生み出され、創造的な多文化共生のまちづくりにつながります。



1. 拠点づくり事業

NPOと企業との共同事業体を立ち上げ、多文化共生のまちづくりに挑戦します。外国人ルーツの人々の生活上の総合的で包括的な多文化ソーシャルワーク実践を。多文化共生と多世代交流と学びの「機会と場」を提供します。

○旧御幸森小学校の跡地活用 事業予定者に決定

「生野区西部地域学校再編計画」に基づく、御幸森小学校跡地活用に関する活用事業者募集プロポーザルにおいて、当法人は株式会社RETOWNと共同事業体を構成し選考の結果、2021年10月21日（木）、事業予定者に選定されました。

○「いくのパーク」の住民説明会の開催

当法人、株式会社RETOWN、御幸森まちづくり協議会の主催、生野区役所の協力のもと、「いくのパーク」の住民説明会を2022年2月25日（金）に、旧御幸森小学校多目的室で開催しました。当日は地域住民の方々をはじめ57名が参加され、事業構想の提案とともに有意義な意見交換を行いました。

○「ふらっとトーク」の開催

旧御幸森小学校の跡地活用の事業予定者として選定された後、地域や関心のある方を対象に、ひざを突き合わせた少人数参加の意見交換会を地元・御幸森会館で連続5回開催しました。当法人から跡地活用の構想や進捗状況などについて報告が行われました。

開催日：2021年12月7日、14日、21日
2022年1月11日、18日（計：5回）
場所：御幸森会館
参加：44名



2. 学習・交流事業

外国ルーツの子ども、日本の子どもをはじめ、誰もが自らの内に秘める可能性を伸ばしていける学びの空間をつくります。

○学習サポート教室の共同運営

地域の教育 NPO であるクロススペースと協力・協働して、すでに実施されている学習サポート教室「DO-YA (どおや)」を共同運営しています。基礎学力レベルから、一人ひとりのレベルに合わせて学習をサポートします。子どもたちの主体性やモチベーションを引き出すための日常的な対話を重視します。日本語指導が必要な子どもたちには、専門性を持った講師たちが懇切丁寧に指導にあたっています。

【開催概要】

曜日：毎週 月、水、木曜日
時間：1 コマ目 17:30～19:00 (90 分)
2 コマ目 19:20～20:50 (90 分)
参加：週44名 (8ヶ国ルーツ)
年間のべ参加者数：1,474名

○コーライズ学習会の開催

拠点づくり（カラーニング・スペースづくり）に向けたヒアリングを兼ねて、学習会や実験的事業を開催しました。

第1回	2021年7月6日（火）	講師：大阪聖和保育園保護者 内容：「障害をめぐる社会との関係」
第2回	7月19日（月）	講師：栗田拓 NPO法人トイボックス代表理事 内容：箕面の事業施設b&gの視察
第3回	10月14日（木）	講師：金恵心 愛信保育園・園長 内容：在日を生きて～これからの生野区に期待すること～

○外国ルーツの子どもたちの支援体制「わかばモデル」構築に参画する

生野区にある府立大阪わかば高校は 2022 年度から府内 8 校目の「日本語指導が必要な帰国・外国人生徒入学者選抜」実施校となります。さらに、地域ネットワークと連携して生徒を包括的に支える体制を構築するなど、高校における多文化共生教育のロールモデルを目指しています。そのためのキックオフフォーラムを開催しました。

名称：大阪わかば教育フォーラム「キャリア支援のための日本語教育と多文化共生」
日時：2021年8月6日（金）

活動報告

主催：同教育フォーラム実行委員会（大阪わかば高校
NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと、NPO 法人
クロスベイス、一般社団法人いくのもり）
後援：生野区、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会
参加：150 名（会場及び ZOOM 参加）

〈I部〉	基調報告	幸川由美子（大阪わかば高校校長）
〈II部〉	パネルディスカッション	高谷幸（東京大学大学院准教授）
		向畦地昭雄（前大阪教育庁教育監）
		山口照美（生野区長）
		金和永（NPO法人クロスベイス学習支援担当）
		甲田菜津美（府立大阪わかば高校教諭）
		金光敏（NPO法人コリアNGOセンター事務局長）

○都市行政ネットワークセミナーの開催

地域内に散在するエスニックな資源や歴史、文化資源のようなさまざまな地域資源を活かした地域全体の人権と多文化共生のまちづくりを学習し、地元の関係者を交えて意見交換を行うことによって包摂都市ネットワークの輪の拡大に資することを目的に実施しました。

日時：2022 年 1 月 27 日(木)

場所：御幸森会館コリアタウン周辺

主催：包摂都市ネットワーク・ジャパン
インクルーシブシティ研究会

協力：NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと

〈報告①〉	「いくのコーライズパーク」構想の展望 宋悟（IKUNO・多文化ふらっと理事・事務局長）
〈現地視察〉	「コリアタウン周辺地域」 金賢泰（NPO法人コリアNGOセンター事務局次長）
〈報告②〉	「生野区役所と多文化共生行政」（生野区役所担当者）



3.多文化イベント事業

多文化・多世代間の新しい出会いと交流の場を通じて、互いの不安や不信の土壌を軽減させ、自信や信頼を醸成する機会をつくります。多様性を実感できる、楽しく面白い機会と場を提供します。

○『教育×e-sports×多文化共生 in生野』を開催

大阪市生野区にある公立中学校を舞台に、地元の中学生と外国ルーツの留学生・日本で暮らす外国ルーツ青少年たちによる e-sports を通じた多様な交流の場が作りだされ、多文化共生のまちづくりに向けたいくつもの「つながり」が生まれました。イベントの様子は 12 月 22 日に TBS「NEWS23」で放送、紹介されました。

日時：2021 年 11 月 20 日（土）8：30～16：00

場所：大阪市立新巽中学校

〈1部〉	しんたつ GO あらうんど II 土曜授業：多文化・交流プログラム（参加：230名）
	主催 新巽中学校
	協力 IKUNO・多文化ふらっと、韓国大阪青年会議所
〈2部〉	しんたつ、勝手に Uber Eats！ 多国籍料理のお弁当を準備（参加：100名）
〈3部〉	生野で、勝手に e-sports 大会 「脱獄ごっこ」外国ルーツ青少年と中学生混合の 5 人チームで対戦（参加：100名）
	主催 IKUNO・多文化ふらっと、韓国大阪青年会議所
	協力 新巽中学校、ロート製薬(株)、(株)スポーツタカハシ、近畿大学国際学部岡崎ゼミ、生野区役所



活動報告

○外国ルーツ青少年の大阪・多文化デイキャンプの実施

大阪に居住する外国ルーツの青少年の交流と支援者団体間のネットワークと組織基盤の強化を目的に「2021年度 外国ルーツ青少年大阪・多文化デイキャンプ」を実施しました。当初2泊3日でキャンプを予定していましたが、大阪府で新型コロナのまん延防止等特別措置が延長されたことにより日帰りの1日キャンプに縮小されました。

日時：2022年3月19日（土）

場所：大阪府立少年自然の家（大阪府貝塚市）

主催：NPO法人IKUNO多文化ふらっと

Minamiこども教室

参加者	IKUNO・多文化ふらっと	Minamiこども教室	合計
子ども	19名	33名	52名
スタッフ	17名	13名	30名
合計	36名	46名	82名

参加した子どもとスタッフの声

・今日参加して、初めての人と友達になったり、一緒に遊ぶことができよかったです。またこういうイベントや友達と遊ぶ機会があるといいなって思いました。

・今日参加できて良かったです。みんなと話して楽しかったです。みんなと力を合わせて疲れたけど楽しかったです。

・今度はお泊りがしたいです。BBQがしたいです。

・つなひきが楽しかったです。来年はドッジボールがしたいです。

・イカゲームが楽しかった。いろんなルーツの人がいていろんな性格もあってすごいと思った。また会えるときがあったら、また話しましょう。

・だるまさんがころんだは、日本語だけでなく英語や中国語でゲームをしたのは、とても楽しめて参加できた。いろんなルーツの子と交流できてよかった。

4.調査・提言事業

多文化共生のまちづくりのためには、人々の意識変革と制度設計が両輪。丁寧に対話する場をつくるとともに、必要な施策・制度を積極的に提言していきます。

○作成論文の発表

調査・提言プロジェクトで作成した論文「大阪市生野区における『多文化共生のまちづくり 拠点』に関わる検討ーまちづくり活動に関わる実践者へのインタビュー調査を通してー」が、2021年10月30日にコミュニティ政策19（コミュニティ政策学会 編）で発表されました。

○生野の“日本語指導が必要な”子ども白書プロジェクトへの参加

NPO法人クロススペースが主催する同プロジェクトに共催団体として積極的に協力・参加し、外国ルーツの中・高生、保護者、学校などの公共機関へのインタビュー調査や「白書」のとりまとめを行いました。

○『2021年都市再生フォーラム』を開催

11月9日（火）、ホテル日航大阪で『2021年都市再生フォーラムー歴史・人権を活かした多文化共生のまちづくりー』が開催されました。同フォーラムには、会場参加とオンライン参加を合わせて180名が参加しました。当法人の宋悟理事・事務局長が第2セッションで「御幸森小学校跡地を活かした『いくのパーク』の挑戦」をテーマに基調発表を行いました。

日時：2021年11月9日（火）

場所：ホテル日航大阪

主催：駐大阪大韓民国総領事館、大阪市立大学都市研究プラザ、NPO法人コリアNGOセンター
NPO法人IKUNO・多文化ふらっと

〈第1セッション〉

基調発表「エスニック地域資源を生かした地域丸ごとミュージアムによるまちづくり」	発表者： 全泓奎(大阪市立大学都市研究プラザ副所長・教授)
	パネリスト： 鄭榮鎮(大阪市立大学都市研究プラザ特任講師) 石川久仁子(大阪人間科学大学社会福祉学准教授) 矢野淳士(AKYインクルーシブコミュニティ研究所研究員)

〈第2セッション〉

基調発表「御幸森小学校の跡地を活かした『いくのパーク』の挑戦」	発表者： 宋悟(IKUNO・多文化ふらっと理事・事務局長)
	パネリスト： 川瀬瑠美(広島文教大学教育学部助手) 阿久澤麻里子(大阪市立大学大学院都市経営研究科教授) 木村和弘(生野区まちづくりセンター常勤アドバイザー)



代表理事2人が語り合う

大阪市生野区 多文化共生の まちづくりのこと



大阪市生野区とのかかわりや、その魅力について

(森本) 生野コリアタウン(御幸通商店街)にほど近い大阪聖和保育園に勤めはじめてから40年になります。生野区の魅力は、お母さんたちによると「生野区は誰でも住みやすい」「いい格好をしなくていい」という感想が多いですね。わりと物価も安く、家賃も安い。スーパーも近くにあり、街の人がみんな気さくに声をかけてくれる。たとえば、障害を持っている人たちも車いすで結構うろうろできるとか、騒ぎながら走りまわる近所の子を「危ないよ!」と優しく声をかける若者がいたりもします。障害をもつ人や高齢の人たちも生きやすい。地域に、いろんな背景を持つ人たちが自然な形で違和感なく溶け込んでいる感じです。一言でいえば、多様性がすごくある街ですね。それが生野区が一番の魅力です。昔と比べて一番変わったのは、日本の若者たちで溢れているコリアンタウンでしょうか。

榎井 縁 (えのいゆかり)

大阪大学大学院未来共創センター特任教授、人間科学博士。専門は教育社会学、多文化共生教育。ネパールのスラムや難民キャンプでの活動や、公益財団法人とよなか国際交流協会子どもや女性を中心に据えた多文化共生のまちづくりを行う。



森本 宮仁子 (もりもとくにこ)

大阪市立大学大学院創造都市研究科修士課程修了(都市政策修士)。社会福祉法人聖和共働福祉会が運営する大阪聖和保育園に保育士として就職、主任保育士、施設長を経て、現在、法人事務局長。

保育園に勤めたころはまだ、「朝鮮市場」とよばれていました。民族保育の学びのプログラムの一つとして、職員たちと食材を買いに「朝鮮市場」に行き、店のハルモニ(おばあさん)、アジョシ(おじさん)たちと習いたての韓国語を使って、やり取りしたことも懐かしく思い出されます。今はオシャレなお店も増えて、週末は真っすぐに歩けないほどになりました。

コリアタウンとして発展していることは、とてもいいことだとは思いますが、個人的には「朝鮮市場」という名前も残してほしい。この名前には地域の在日韓国・朝鮮人の人たちがたどってきた差別や苦難、逆に逞しさやおおらかさなど生野ならではの得難い歴史の一面が詰まっているような感じもするからです。街全体の歴史や文化のなかで、引き継いでほしいものと変わるべきものが複雑に交差している時期かもしれません。両方とも大事にしてほしいと思っています。

地域に、いろんな人たちが自然な形で違和感なく溶け込んでいる。(森本)

(榎井) 30年ほど前になりますが、私が研究・教育で大阪に来た契機は、外国人教育を推進している日本人教員の存在でした。その方の拠点がまさに御幸森小学校でした。地域で多様な在日コリアンの方と関係を結んでおられ、「外国人教育は日本社会(自分自身)の問題だ」と口癖のようにいわれていました。その後私も、在日コリアンの当事者との多くの出会いの中で、自分の中にある「在日コリアンは、

こんな歴史や思いを持っている」といった一枚岩的な、本質主義的な見方でなく、一人ひとりの背景を丁寧な知ることによって認識が豊かになり、他人事ではなく自分自身と重なっていくという経験をしました。

20年ほど前には、ある市民団体の主催で御幸森小学校の講堂で多民族・多文化のフォーラムを事務局長の宋悟さんと一緒に企画・運営しました。パネリストに在日コリアンをはじめ新渡日のフィリピン人や日系ブラジル人、北海道からアイヌ民族の活動家、沖縄からアメラジアンスクールを支援・運営している研究者などを招いて行いました。当時は、これこそ日本社会の問題だと提起し快挙だと思ってやりましたが、勇み足で終わり、地域でコンセンサスを得ることの重要性を痛感しました（笑）。

大阪聖和保育園の「民族教育」について

（森本）「民族保育」の意味合いとしては3つあります。一つ目は多文化共生保育です。外国ルーツの子どもたち、保護者のもつ文化やルーツを大切に、ともに生きていくことです。二つ目は、地域の特性として在日韓国・朝鮮人の子どもや保護者も多いので、いわゆる「在日」の民族教育としての民族保育です。三つ目は、誰もが尊厳を持つ人であることを当然の前提とした人権教育としての民族保育という意味です。この3点が融合しているのが「民族保育」です。韓国・朝鮮語の歌や挨拶、物語、手遊び、体操などを日々の保育の中に取り入れています。民族保育の経験を通じて最終的には、「在日」の子どもたちが民族的ルーツに自信や誇りをもつとともに、日本人の子どもが「在日」の子どもたちを自分たちの仲間だと実感できること、そして「在日」と日本人の子どもたちが共に生きていく力を身につけてほしいと願っています。



日本社会では、「在日」の子どもたちが民族的なアイデンティティに誇りや自信をもつための機会をつくるのは難しい。その「土台」がしっかりしていないと上に立つ建物は崩れていく。「在日」にとっては、いまだ日本社会は意識や制度面において暮らしづらいところが残っています。地域住民として税金は払うが、地方選挙権もない、公務就任権も制限されています。大阪市の場合いまだに外国籍の人は消防士になる資格すらありません。子どもたちにはせめて、アイデンティティ形成の土台部分だけはある環境を準備してあげたい。民族保育は、歌を歌う、手遊びをする、踊りを見せるみたいなことでしかないけれども、すごく大事なことでないかと再認識しました。この種まきは、キリスト教でいうと「良い土地に落ちると100倍に実を結ぶ。悪い土地に落ちると枯れてしまい花は咲かない」ということ。小さいときの民族保育の記憶が、大人に成長していくときに「在日」として、外国ルーツとして自分自身に向き合ったり、一方で日本人として「在日」や外国ルーツの人たちに向き合うときに何かの大きな力になるのではないかと、そんな思いで民族保育に取り組んでいます。

「在日」の人たちと来日の経緯は違うけれど、新渡日の外国人の人たちも、不寛容な日本社会の中にあってもいずれ「在日」と同じ道を歩むと思っています。母語を使いづらい雰囲気があったり、本名を名乗りづらくなったり。母語や本名を大事にしていく環境が大切です。だから、聖和保育園の朝のあいさつ時間は長いんですよ。保育園に通うすべての外国ルーツの子どもの母語で「おはよう」とあいさつするから。0歳児の子に、その子の母語で話しかけると、他の0歳児も顔を向けます。“あなたのことば”を受け渡しているように見えます。互いが自尊感情を持ちながら、それをつないでいく。こうした日常の何気ない民族保育の延長線上に、将来の多文化ふらっとの実践があるのかなと感じています。



小さい頃の多様な背景の仲間との経験が
人権問題を身体で実感できる土壌をつく
る。（榎井）

（榎井）大学で「社会と人権」という国際人権等を扱う授業があり、課題を具体的事例から考えることをしています。そのときに「思い出しました」「怒りがわいてきました」という学生が結構います。10年前後前の、小学時代に、民族教育を受ける友だちがいてその意味を教えてもらっていたこと、特別支援学級や学校との交流の中で友だちができたこと、末期がんの友だちと最後はお別れしたことなどが記憶の中から蘇ってくる。だから、社会の中の理不尽な差別や偏見などの課題を提示すると、その経験から自然と怒りがわいてくる。やっぱり子どものときに、出会いを経験した学生は違います。小さい頃から多様な背景の仲間と接してきた経験は、大人になって人権問題を身体で実感できる土壌をつくります。そうした機会があった学生と、残念ながらなかった学生では人権感覚が全然違う。子どもは学齢が上がるにつれ、「進学という名前の競争」によって、自分の周りには同質的な人間しか残らなくなる。同質性のなかで更に競争は続いていくわけです。多様性はなくなります。

30年以上在日外国人問題に関わって、改めて思うことは1990年代の日系人の受入れ以降、労働力としてのみ人を受け入れてきた日本社会の歪さが浮き彫りになっていると感じます。豊中市で調査を行っていますが、地域と接点のない外国人が増えています。職場と自宅しか行かないし、行けない。夜中とか朝早くに働かされている。地域にいるはずの外国人たちが顔の見えない存在になっています。「使い捨て」できる若い労働力を大量に導入している深刻な問題です。ここで再度地域社会のもつ役割と重要性を考える必要があります。その中で希望は、次世代の子どもです。日本で働く外国人たち自身が、ここで長く暮らしていこうと考えはじめています。

子どもを呼び寄せるなど家族の統合を図ったり、日本で新たな家庭を築くなどが進むと、子どもの子育てや教育という分野で、顔が見える関係ができる可能性が高まります。地域で共に生きる実態が浮かび上がるチャンスにもなります。労働力の最底辺を支える「技能実習生」や「留学生」は地域での生活実感がないような状況にあります。今後かれらが定住し、次世代の子どもが生まれ育っていけば、子どもの教育を受ける権利は保障されなければなりません。保育園、幼稚園、小学校で、地域社会との接点が生まれた後、教育機関と地域で仕組みをつくっていくことが不可欠だと思います。

「子育ては地域に還る。」（森本）

（森本）不条理な差別や偏見に「怒ることができる」という感性をもつことは重要ですよ。地域に外国人が「“いる”のに、“いない”存在になっている」との指摘は同感です。障害を持つ子どもたちの子育て、教育についても考えることが多いです。一人ひとりの子どもの発達を「合理的配慮」という枠のなかで発想する仕組みにばかり集約され、一人ではできない部分を、どうすれば自分が助けることができるのか、というインクルーシブな視点がまだまだ弱いですね。聖和保育園には、毎年障害を持った子どもも入園してきますが、子どもたちは普段通りで特別視しません。今年は酸素を取り込むためのチューブを装着した子どもが入園しましたが、「このチューブは息を吸うのに必要だから踏んだらあかん、取ったらあかん」と保育士が伝え、子どもたちは聞いて了解し、チューブを踏んだり取ったりすることなく、みんなで元気に遊び続けています。

日本の外国人政策の基本は、家族帯同を認めない、在留期間を限定するというのが基本です。しかし実際は、定住や永住する人は増えてきています。そうすると子どもが生まれ、子育てを通じて保育所や近所・地域とつながります。つまり「子育ては地域に還る」ものなのです。生野区は暮らしやすいと言われて、60か国以上の方が暮らしています。地域住民として、ともに生きていければいいと思っています。子育てすると「子どもは泣くし、ミルクやご飯は食べなあかんわ、どうして育てていくねん」という声が必ず地域のあちこちから聞こえてきます。そうした状況を優しく包み込む地域社会であって欲しい。子育て中の家庭が安心して寄ってこられる、暮らしていける場所・地域であることはすごく大事なことだと思います。

（榎井）子どもの権利条約自体が、子どもの保護の責任を個人だけに負わせないところから発想が始まっています。子どもの「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」、「参加する権利」は、保護者に大きく左右されます。そこをみんな（地域社会）で関わることで乗り越えたい。出自や属性、それに加え経済的格差など、個人の責任ではない理由でしんどい状況に置かれてきた子どもや親がたくさんいます。生野区は、ともに生きることを大切にして、ずっと見守ってきた街だと思います。今もう一度そうした場をきちんと創り、それを開くことが必要だと思います。「子どもが無条件に守られ愛されるサンクチュアリ（聖域）」、そんな領域というのがあってしかるべきだと私は思います。

企業や大学など他のセクターなどとの連携・協力のあり方について

（榎井）大学として地域連携という視点はすごく大事にしているけれども、具体的な地域連携ができていくところはすごく少ないと思います。なぜかというところ、大学の先生はほとんどが研究者ですから、地域の実践の場は「研究」の対象にはなるけれども「協働」の対象にはなりづらい。「協働」という発想になってきたのも、そんなに長い歴史があるわけではありません。「体裁だけの使われ方・使い方」という関係ではなくて、大学と地域の双方にとってメリットとなる「協働とは何か」について真剣に問われているのではないのでしょうか。そういう意味で地域と向き合うときには、そうした問題意識を突き付けられているというか、ドキドキものなんです。

大学の文系学部を卒業して研究に進むと、「使えない」と指摘されています。「研究はできるが、実生活や実社会に対して何もできない」という意味です。それは、大学で研究だけができる研究者ばかりが評価されてきたからだだと思います。これからは、研究値と実践値を現実社会のなかに活かしていける学生を育てないといけないと思っています。研究者として生き残れる人は、ほんの一握りであるのが現実だからです。これからは研究することに意義を見出した人たちが、大学院なりで得た「知」を活用して、どのように社会に還元したり、地域とともに考え実践できるかが求められます。そこに大学から見た地域に実践的に関わるメリットがあります。

地域のNPOにとっては学校との連携・協力関係も重要であると思います。地域はやっぱり学校区の単位で動いたりするものですから。また学校だからこそ把握できることも逆に多い。IKUNO・多文化ふらっとは、私たちがつくる地域の「公」の場所でありたい。ある一定の決まった人たちが使えるということではなくて、対外的にも開かれたものとして、また行政や学校など公的なセクターとのつながりも大事にしたいと思っています。

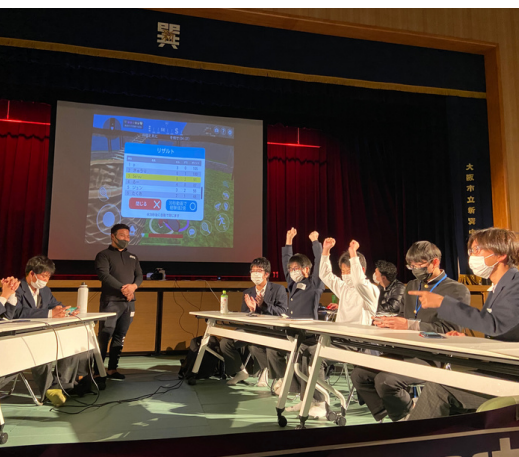
多文化ふらっとの活動を通じて実現したい夢について

「ばづくり、ひとづくり」。
その循環をつくるのが無限の可能性をつくる。（榎井）

（榎井）今年（2021年）5月末に逝去された故金相文さん（多文化ふらっと理事）のことを考えます。相文さんは私の後任として（公財）とよなか国際交流協会の事務局長を担って下さいました。相文さんから、多文化ふらっとに誘っていただいたとき「ああいう場所を作りたいねん」とおっしゃっていました。拠点・場はすごく大事なものです。それを生野区の旧御幸森小学校の跡地を活用してつくりたいという気持ちがあります。場をつくることによって人がつくられます。「ばづくり、ひとづくり」です。そこで人が育ち、また別のところに場をつくるという循環があればすごくいいなど。その循環には無限の可能性があります。本当にいろんな人が関わるができる場がいい。「関心・興味がある」、「生野を盛り上げたい」という人がいてもいいですし、「お金しか出すことができないけれど」という人も大歓迎です（笑）。

（森本）「違い」や「多様性」があるというのは、すごく豊かなことだと思っています。でもそのことを普段の生活の中で実感することは少ないのではないのでしょうか。多様性とは、こんなに豊かだったんだとか、違うってこんなに素敵なんだと感ずることができる場が欲しいですね。「私ってここにいる、よかったんだ」と思えば、きっと「あなたもここにいていい」と思えるようになるのでは。そう思える場をつくりたいと思っています。多様な学びや考え方、そして悩みや喜びも互いに受け止め、共有できる場をつくってほしいと思います。

聞き手：宋悟 事務局長



2021年度会計報告

(2021年4月から2022年3月)

2021年度 活動計算書

単位：円

科目	2020年度①	2021年度②	増減値 (②-①)
I 経常収益			
1.受取会費	90,000	100,000	10,000
2.受取寄付金	2,001,400	3,607,400	1,606,000
3.受取助成金等	7,181,000	7,589,483	408,483
4.事業収益	0	0	0
5.その他収益	0	7	7
経常収益計	9,272,400	11,296,890	2,024,490
II 経常費用			
1.事業費			
(1)人件費	3,122,454	4,671,209	1,548,755
(2)その他経費	2,516,502	4,902,410	2,385,908
事業費計	5,638,956	9,573,619	3,934,663
2.管理費			
(1)人件費	0	833,840	833,840
(2)その他経費	219,878	350,979	131,101
管理費計	219,878	1,184,819	964,941
経常費用計	5,858,834	10,758,438	4,899,604
当期経常費用増減額	3,413,566	538,452	▲2,875,114
当期正味財産額	3,413,566	538,452	▲2,875,114
前期繰越正味財産額	4,599	3,418,165	3,413,566
次期繰越正味財産額	3,418,165	3,956,617	538,452

〈2021年度理事会および総会の開催〉

2021年度は（公財）日本国際交流センター（JCIE）による「外国ルーツ青少年未来創造事業」（休眠預金活用事業、2020年4月から2023年3月）の2年目の助成を受けました。また2022年4月から始まる旧御幸森小学校の跡地活用として多文化共生のまちづくり拠点「いくのコーライズパーク」（略称：いくのパーク）の設立に向けた寄付金活動も1月からスタートしたことに伴い、募金額も増大しました。次年度から収益事業が始まる予定。

- 第1回理事会（事務局）
 - 【日時】 2021年5月13日（木）13時～15時
 - 【出席】 理事5名中5名、（事務局）3名
 - 【議案】（1）2020年度事業報告
 - （2）2020年度決算報告／今後のスケジュール
- 第1回総会（みなし）
 - 【日程】 2021年5月28日（金）
- 第2回理事会（会場：御幸森会館）
 - 【日時】 2022年3月13日（日）15時～17時30分
 - 【出席】 理事5名中4名、（委任）1名（事務局）2名
 - 【議案】（1）2021年度事業報告（暫定）
 - （2）2022年度事業計画について
 - （3）「いくのパーク」事業の進捗状況について

ご支援のお願い

みなさまのご支援が大阪市生野区の
「誰もが暮らしやすいグローバルタウン」を目指すために役立てられます。

みなさまからのご支援は、当法人のビジョンの
実現に向けて役立てられます。
寄付金は以下の事業運営に活用されます。

- 子どもの学習支援
- 子ども食堂の運営
- IKUNO・多文化共生センターの運営
- 子どもの居場所コラーニングスペースの運営
- 子育てをサポートする図書室や地域に開かれた場（体験農園など）の運営 等

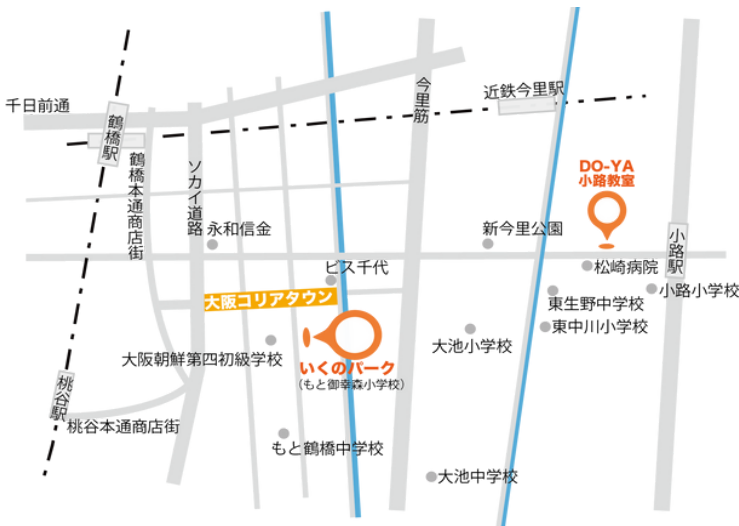
■会員制度

NPO法人IKUNO・多文化ふらっとの活動にご賛同
頂ける個人または法人団体の正会員または賛助会員
を募集します。正会員は年1回の開催される総会での
議決権があります。会員には、シンポジウム・セ
ミナーなどの案内と年に1回発行する年次報告書をお
届けします。

正会員 : 年会費 1口 10,000円
賛助会員 : 年会費 1口 5,000円

■寄付・寄贈

ご自由な金額でのご寄付もお受けしております。



《振込先》

ゆうちょ銀行
(店番) 408 (預金種目) 普通
(口座番号) 5018817
(口座名) IKUNO・多文化ふらっと

※上記のゆうちょ銀行に会費・寄付金を振り込まれた方は
お手数ですが①お名前 ②ご住所 ③連絡先(携帯電話・
メールアドレス)を下記の電話かメールにご連絡下さい
ますよう、お願い致します。

■連絡先

特定非営利活動法人IKUNO・多文化ふらっと
〒544-0034 大阪市生野区桃谷4-5-15
班家食工房2階
TEL: 06-6741-1123 (FAX兼用)
E-mail: ikunotabunkaflat@gmail.com

※2022年8月から当法人事務所は「いくのパーク」
内に移転します。
新住所: 生野区桃谷5-5-37



「いくのパーク」クラウドファンディング実施中!

詳しくは、上のQRコードまたは「いくのパーク グッドモーニング」で検索

発行日 2022年7月1日

